

# 『中国文学月報』『中国文学』における戦時下の日本知識人の離郷と帰郷——竹内好の視点から

The Japanese Intellectual's Sensibilities of Exodus and Homecoming in "Chinese Literature (Monthly)" and "Chinese Literature" during Wartime: from Yoshimi Takeuchi's View

趙 松娟

ZHAO SONGTUAN

**要旨** 本論では、雑誌『中国文学月報』『中国文学』・日記・書簡など虚構性の低い資料を対象とし、戦時下の時代を一人の青年知識人として生きた竹内好に注目する。異郷である中国と故郷である日本との間、離郷と帰郷との行動を繰り返す中で、ナショナリズムに危く接近しつつも、戦時イデオロギーへの批判的視座を獲得した。このような竹内の思想的変化は、帝国というテリトリーの「内地」の統後に身を置いたままであったなら、実現される確率が低い。雑誌『中国文学月報』『中国文学』・日記、書簡に記録された竹内の言論は、現実社会における当時の知識人の、戦争による思想的変化の的確な見取り図を提示していた。

## はじめに

『中国文学月報』（以下『月報』と略記）と『中国文学』は、竹内好の主導により結成された中国文学研究会<sup>1</sup>（以下「研究会」と略記）が一九三五年三月より発行した機関誌である。当初は『月報』として創刊されたが、一九四〇年二月、研究会の改組に伴って『中国文学』と改題されることになった。『中国文学』は、『月報』の巻号を継承し、同年四月一日付の六〇号から刊行が開始された。中国現代文学を紹介する市販雑誌であった。一九四三年一月の研究会の解散に伴い、同年三月に九二号を「終刊号」として刊行した。この八年一ヶ月のあいだ、日中戦争、太平洋戦争をまたいで、同誌は五回の

休刊をのぞいて、ほぼ月刊を維持しつづけていた。

研究会は「中国文学の研究と日支文化の交驩を目的とする研究団体」であり、雑誌における研究が中国の「現代文学のみならず古典にも渉るし、出来得べくんば文学だけでなく文化一般にも亘りたい」と一貫して主張していた。その主張に基づき、同誌は従来、中国現代文学・文化の研究を目的とした純粋な学術雑誌として認識されてきた。

戦前の中国文学研究においては古典研究が主体であった中で、中国現代文学の唯一の紹介団体として立ち上げられた研究会は、当時の「さまざまな形で生まれはじめていた中国の現代文学への関心を、タイミングよくつなぎ合わせて組織化する働きをした」<sup>6</sup> 異質な存在であった。「旧来の漢学アカデミズムに反旗を翻すべく企図された、

多分に政治的な試み<sup>⑦</sup>」として立ち上げられた研究会の同人たちは、一流の既成作家や中国文学研究分野の有名な学者ではなく、無名な青年層知識人の一群であり、日中戦争全面化の展開に伴い、彼等は当時の日本の華北占領政策のために、そのほとんどが留学や、出征あるいは新聞記者としての取材などによって、異郷の中国現地に渡った経験を持っていた<sup>⑧</sup>。特に、研究会及び同誌の発起人であっただけでなく、研究会の解散と同誌廃刊の決定者でもあった竹内好は、一九三二年の大学時代から終戦までの間に、学生、留学生、調査員、軍人といった、それぞれ異なった身分で、計四回、中国現地へ渡航している<sup>⑩</sup>。

竹内は、中国現地での体験によって中国および中国文学への認識を深めつつあった。そのことは、同誌誌面における竹内の言説にも投影されているが、戦時下になると、日本帝国主義文化ナショナリズムに同化した言説が混じり込んでいる。本論は、研究会の主張と誌面における実際の言説とを併せて読みながら、研究会の最初の主張からの変化を検証し、同誌の多様性を再確認しようとするものである。本研究において焦点を当てたのは、日本における現代中国文学研究という領域の創始者と評され、形式を問わず、誌面において露出度が高く、同人と会員のために出来得る限り自由な言説空間の土俵を創りあげ、同誌に一一八篇の文章を掲載した竹内の言説である。これらの文章を時系列的に考察し、初期の政治的色彩のない、純粹アカデミック志向の文章から、戦時下における日本帝国文化政策に同化した文章への変化と、竹内の二回の中国現地体験との関わりを検証したい。

竹内の同誌誌面における言説に関する研究については、一定の成

果が累積されている。誌面における中国文学の紹介について、飯塚容は、竹内が「意図的に日本の作家、評論家に論争を挑もうとしている」傾向を見せるのに対し、研究会が立ち上げられた時の重要なメンバーの一人であり、竹内の盟友とみなされる武田泰淳は「比較的穩当」であり、武田の方がより「効果的」であった、と評している。また、孫歌は竹内の書いたものが「評論の色彩が強く、中国を理想化しすぎ」ていて「客観性」に欠けていると評価している。

竹内と武田との関係について、大原祐治は、政治性先行の竹内のラディカルさに対して、武田は「時に竹内に対する〈アンチ〉の立場を相対的に形成し、ブレーキをかけるような役割を果たしていた」とし、二人の「対立―盟友」関係をもって「相補的に戦時下の言説空間を通過」したと評した。

竹内の北京現地体験について、朱琳は、一九三七年から一九三九年までの二年間に、留学生であった竹内と兵士であった武田は、それぞれの異なったアイデンティティによって異なった「中国像」を構築したと述べている。近年では、岡本麻子が「北京日記」について考察し、竹内が自らの研究会と中国文学への強い意志と「時代の現状分析とその意味の分析ができない」という現実との隔たりの中で、「無力、無所有な場所に追いつめられる自己解体に至った」が、「岡本かの子への傾倒」を通して「生命の力」を燃やすことを求め<sup>⑬</sup>るようになったのであり、その契機は北京で偶然に出会った峯子<sup>⑭</sup>という女性との恋愛であった、と論じた。岡本の論述を踏まえて、余樟延は「日本化された政治から遊離する「文壇」の作家の個人的な視線が現れる」希望に背かれて「絶望」に陥った竹内が、「峯子との「生と性」の恋愛を体験し、「社会の中で不遇や辛苦などに直

面しなければならぬ普通の社会人の全体像」を発見し、それが竹内「自身の覚醒」を促し、「文学と社会、文学と政治が関係していることを次第に理解できた」と述べている。<sup>18)</sup>

一方、幼方直吉は、竹内の「発言を彼の生活、行動と切りはなしで、考えないわけにはいかない」と指摘し、四回目の兵士としての中国体験を別にしても、前の三回の中国体験は、つねに「日中戦争のまがり角の直後の中国民衆の生活とその意識の変化」を「日本人のインテリとして凝視し」ていたが、一貫しているのは、中国の民衆を自分と同じ人間としてみるという「立場」に立つと述べている。<sup>19)</sup>と述べている。飯倉照平は、竹内の四回の中国現地体験を、時代背景と結び付けて、時系列的に簡単なコメントをつけて紹介した。<sup>20)</sup>

しかし、これらの研究においては、雑誌の創刊から廃刊に至るまでの、竹内の二回の中国体験が同誌における竹内の言説にもたらした変化に対する考察が十分には行われていない。そのため、本論においては、竹内の中国体験と同誌における言説とを照らし合わせ、戦時下において異郷である中国と故郷である日本を行き来したことによって生じた思想的变化が、いかにその時代において喧伝されていた愛郷心、愛国心と絡み合っているに織りなされたか、を検証し、一人の日本青年知識人像を把握しようとする。同時に、戦時下における〈故郷〉意識の問題を相対的に捉える契機として、日本の「外」から見た日本に関する問題を扱う。

竹内が最初に中国へ渡航したのは一九三二年の夏である。当時学生だった竹内は、「本気で中国文学をやろうという気はなく、中国にたいして関心ももたなかった」にしても、「たまたま行きついた北京」の「風物と人間と」に魅了され、「中国との結びつきは、こ

のときにはじまる」と回想している。初回の北京体験は、その後の研究会の設立と『月報』創刊の伏線となったと言える。

一九三七年一月十七日、竹内は、研究会成立後の同人の中で、はじめて留学生として北京に送られた。これが竹内の二回目の中国行であった。この時の竹内は、中国という他者に学ぼうという意気込みに駆りたてられていた。出発の翌月に発行された『月報』第三二号（一九三七・一一）の「後記」における「竹内は十月十七日、北京留学の途上に上った。本会成立以来、同人の留学を送る最初である。永らく望んでゐた会の触手が、やうやく彼方に伸びたことを喜ぶ。来号からは彼の新鮮な報告が載せられる筈である。期待せられたい」という言説から、研究会の同人及び会員たちが竹内の北京行に多大な期待を抱いていたことが読み取れる。同時に、竹内は中国文学を研究するという志をもっていて出郷者となったとはいえるのであろう。だが、竹内が敬愛と憧憬の念をもって渡航した北京は、当時どのような実状だったのだろうか。この点について確認しておきたい。

## 1 「異郷」としての北京

### (1) 被占領下の北京市空間

一九三七年七月七日に「盧溝橋事件」が勃発し、日中戦争が全面開始した後の七月二十九日、北京は日本軍に攻め落とされた。同年一月一四日に被占領下の北京で傀儡政権の中華民国臨時政府が成立された。一年も経たないうちに、北京は政治・経済・軍事・文化・治安などの社会生活のあらゆる分野にわたって、日本側への協力者

たちの強力的な支配下におかれて、言論・表現の自由というものをも失っていった。

それに伴って、被占領下の北京の人口は急増し、一九三六年には一五三万人だったものが、一九三九年には一七三万人となった。その中には、地方の治安不安定を逃れて北京城内に流入した中国人民衆の数が少なくない。他方で、「北京ブームともいべき現象」<sup>(23)</sup>で、日本人も急激に増加し、事変前の一九三六年一月には四千人だったものが、一九三九年十月には四万一千人となっていた。「北京へ来る内地からの観察員観光客」も数多かつた。人口増加への対処として、北京の「伝統的な都城の雰囲気・都市美を尊重する」都市計画も立案、実施された。

文教界においても激変が生じており、大学は全滅した。北京にあった北京大学、清華大学、天津の南開大学の三校は統合され、一九三八年四月、雲南省昆明で国立西南聯合大学として再組織された。<sup>(27)</sup>同時に、老舎をはじめ多くの目ぼしい文人たちは、重慶・延安などの抗戦地区へ脱出して活動することになった。<sup>(28)</sup>このようにして、「北京で20数年に及んで盛り上がりを見せた新文学運動も姿を消し、文壇は静寂に沈んだ」<sup>(29)</sup>。当時の北京文壇に留まっていたのは周作人、徐祖正、傅仲滔と錢稻孫などわずかである。<sup>(30)</sup>

このような風雲急を告げていた状況のもとで北京に到着した竹内は、北京体験でいかに理想と現実を見極め、それはどのようなように誌面における言説と連動していたのか、を検証したい。ここでは、主に竹内の「北京日記」や、親友との往來の手紙を参考にしながら、「北京通信」(『月報』第三三三号、一九三七・一一)、「北京通信・二」(『月報』第三四号、一九三八・一二)、「周作人隨筆集・北京通信・三」(『月

報』第四二号、一九三八・九)「二年間」(『月報』第五七号、一九三九・一二)などの北京時代に関して書かれた文章での言説と結び付けて考察を行う。

竹内は北京で二年間留学したとはいえ、一九三九年の二月と六月の二回にわたり帰国して山東青島にも寄っていたため、実際に北京に滞在した時間は一年半余りである。次に、竹内の北京時代の動向を時系列的に考察する。

日記によると、一九三七年一月二十五日北京に到着した竹内は、「北京通信・二」を書き上げた二月五日までは、日本の統治機構の役人や、同じような身分の日本人の留学生との付き合いが多く、また中国文学の研究に関わる書籍の購入が多い。そもそも、政治的色彩がなく、純粹にアカデミックな日本文学と中国文学との交流を求めていた竹内は、「北京通信」において「軍事と政治と文化とは、あたかも一本の触手の如く動いて」、「孤立した学問の權威が痛快に失墜せしめられる」と記している。「僕はいま北京の人々に失望しても、本来の中国文化には失望してゐないつもりである」が、「僕らのやつてきた仕事は、この地にさへ、少なくともイデオロギー的には、なにがしの果を結びかけてゐると思へる」戦乱下の北京に沈潜しようとしたのである。ところが、一ヶ月後の「北京通信・二」において、竹内は「劫をへた北京の魔性にいつか誑かされてゐるのかも分かりません」と自分の無力感を吐露している。つまり、この二ヶ月間は、竹内にとっては北京現地の状況を把握し、留学での基本的な生活を落ち着かせる時期であったと言える。

次には、一九三八年に入ってから竹内の言動を確認したい。

(2) 新民主主義の翻訳

一九三七年一月三〇日から、竹内は内務省の事務官の公邸に通いはじめ、一九三八年一月四日夜、顧問として入居したが、二五日には家に帰り、二月一日から四日まで「新民主主義」という中国語の文章を日本語に翻訳した。七頁の日本語訳のものであるが、この「新民主主義」は「日本軍による占領統治下の華北地方におけるイデオロギー」の要約だと推定され、日中両国文化人の知恵を結集して一九三七年一月二四日に産声をあげ、新民会の指導原理として正式に公認されることになったものである。新民主主義を抜きにして戦時下の華北地方を語ることはできないということである。彭程は新民主主義を次のように解釈している。

臨時政府はこれに基づき、欧米思想の一掃、共産主義の排撃、三民主義の排除、そして「日支親善」の政治目的を推し進めた。

〔…〕

「新民主主義」の標榜した「新民」が征服者のもとにひれ伏す「臣民」であり、「新民主主義」を「臣民主義」と呼んでもいいだろう。

〔…〕

「新民主主義」は新しいイデオロギーとして華北地方に広げられていただけでなく、後に排他的・閉鎖的なナショナリズムの超克、アジアの解放、日本の指導的役割などを主要内容とする「東亜共同体論」に発展し、最後に「東亜共栄圏論」の一部分になり、日本帝国主義の中国侵略体系に土台を打ち立てたと言っても良い<sup>(33)</sup>。

そして、彭は、儒教思想の「柔軟な一面、とりわけ服従性を強調する一面を中核」に、「不殺生」という仏教思想を取り外して道教要素を取り入れ、「戦争有功、侵略有理」を論証した<sup>(34)</sup>と述べている。すでに確認したように、事変後、数多い日本人が北京に渡ってきたが、そのうち知識人は僅かであった<sup>(35)</sup>。竹内の一九三七年一月三〇日の「北京日記」によると、外務省の留学生が一人（一九三七年一月各六人、三年一人）、特別研究員三人、他に東大関係の二人で、合わせて三五人である。そのような状況の中で、日本軍に占領されたばかりの華北地方における新政治指導原理を翻訳したことは、支配者側の日本人の新民主主義に対する理解に役立ち、竹内に北京の文壇でも同期の留学生や占領当局でも一定の知名度を獲得させた<sup>(36)</sup>と推定できる。

(3) 日本語教師の担当

新民主主義の翻訳終了後の三月一七日、竹内は近代図書館の日本語講習の講師を務めはじめた<sup>(37)</sup>。八月二七日に辞職したが、九月一七日には北京大学理学院の日本語講習の講師を引き受けた。

占領下北京での日本語教育政策は、従来の「一言語一文化をその占領地域に強要する」帝国主義の統治の手段と異なり、「支配的な言語」|| 中国語と「軍事的な支配者の言語」|| 日本語との「二言語二文化共存」<sup>(38)</sup>の閉じられた支配政策が実施されていた。親日教育のため日本語教育に力を入れた日本軍は、少なからざる場所で日本語習得ブームが起こったことを喜んだ<sup>(39)</sup>。そして、「小、中、高校から大学まで、学校における日本語科目の設定など、日本語教育の制度化が図られた一方、各種の官、公、私立の日本語教育機関も乱立した」<sup>(40)</sup>。

竹内の一九三八年八月二二日の日記に「国際文化振興会の日本語海外普及に関する第一回及第二回協議会要録をよむ」という記述があることから、彼が日本占領文化政策の一環としての日本語教育政策のを知っていたことがわかる。しかし、九月一七日の日記には、「アイマイなると政治関係その他を顧慮して即座に断りしかど」、結果として「北大理学院日本語教師の四時間を引き受」けた、とある。

以上確認したように、日本軍の支配下で、外務省という公的機関からの派遣という制約を受けながら、内務省事務官の顧問、新民主義の翻訳、日本語教育の仕事を経験した日本知識人のエリートの人である竹内は、徐々に当局の占領政策に巻き込まれていったのである。竹内は「周作人随筆集・北京通信・三」において「人間の心の成長に関して戦争の驚くべき作用の一面を考へ」、「悪劣なる心境をもって何をか言わん。何をかなさん」という感慨を吐露している。竹内は、この悪劣な心境を打ち破ろうと努力を続けていた。しかし、その可能性はあり得たのだろうか。次に、その点について検討するため、北京現地での交友関係を確認してみることにした。

#### (4) 交友関係

「北京日記」によると、「日本軍の安全保障に頼り、大使館の指示に従わざるを得ない」竹内の、北京での中国知識人との交流については、周作人<sup>(42)</sup>、銭稻孫<sup>(43)</sup>、徐祖正<sup>(44)</sup>、沈啓無<sup>(45)</sup>、張我軍<sup>(46)</sup>、竹内の中国語の先生であった楊聯陞<sup>(47)</sup>などの名前が見られる。これらの人たちは、周作人をはじめ日本語の達者な人物がほとんどであり、使われた言語も多くは日本語であつたらう。従って、こうした親日派人士との交流の中だけでは、やはり本当の中国はある程度しか見えてこなかったの

ではなかるうか。

日本側の知識人には、研究会の同人の飯塚朗<sup>(48)</sup>、千田九一<sup>(49)</sup>、岡崎俊夫<sup>(50)</sup>、実藤恵秀<sup>(51)</sup>、留學生の神谷正男<sup>(52)</sup>、燕京文学同人の長野賢<sup>(53)</sup>などがいた。彼らはいずれも、なんらかのかたちで、占領当局とのかかわりのある公的機関に関与していた。

占領政策に協力することが要請されていたこの時期は、中国側の知識人にしても、日本側の知識人にしても、北京に留まっている限りは、占領当局に協力することが望まれていた。従って、竹内の求めていた政治から離脱した純粋な文学的交流が実現できなかったことは、いうまでもないであろう。

次に、中国の現実に向直し、日本にいた時の中国への幻想が破滅してしまつて「失語症<sup>(54)</sup>」に陥つた状態のもとで、一旦（日本）という故郷を出たところ、自分が、なににも、なり得ていないのではないかという不安に襲われていた竹内が、異郷の北京で経験したノスタルジアについて見てみることにしたい。

#### 2 志を果たせなかつた出郷者のノスタルジア

そもそも、竹内は誌面においてプライベートのことに言及していないため、故郷に関しては明確な言説は見出せない。しばしば言及された故郷とは、出生地の長野県南佐久郡白田町のことである<sup>(55)</sup>。しかしながら、竹内は三歳の時に東京に移住して、大阪高等学校に入学する一八歳までに東京にいた。竹内の文章には、実際に北京現地で親友からの手紙を受け取ったり、日々の光景からふと故郷が連想されたりといったことをきつかけにして、東京のことがたびた

び出てくる。ここでは、誌面における言説と日記を追って、その点を検証することにしたい。

「北京通信」(『月報』第三三三号、一九三七・一二)において、竹内は次のように記している。

チキンライス四十銭、ぜんざい十五銭と書いた壁の張紙を眺めて僕はいつか震災後の東京の街を聯想してみた。はじめ、異郷にある侘しさを覚えたのもこの時であつたかもしれない。  
 「…」もとより変化といへば、日本人の飲食店がむやみにふえ、あやしげな女たちが白昼横行する変化はあるだらう。

ここに示されているのは、竹内に初めて「異郷」と「故郷」の意識が芽生え、戦乱下の北京を目の前にして「東京」という空間が想起されている、ということである。そして、「周作人随筆集―北京通信の三―」(『月報』第四二二号、一九三八・九)において竹内は、次のような感慨を吐露している。

北京に住みついて、近頃は道を歩きながらあゝいま自分は何かも考えてゐないのだなと気づく瞬間がある。その瞬間は北京の空がいかに美しい。大抵は四牌楼の上に夕鳥が群れてゐる。自分もどうやら北京人種に近づいていくわいといふこれは反省といつて当たらないが、子供の時よく見た夢で、自分の屍を自分で見てゐる時の、叫びをあげようにも聲の出せない切なさに似てゐる。いささか後ろめたい感慨でもある。さりとてこのまゝ醒めきるには惜しい夢でもある。

北京の美しい夕空の風景を目前にして童心<sup>56</sup>に子供時代の記憶が誘発されていた竹内は、疑いなく出郷者としてのノスタルジアも折々呼び起こされていた。異郷としての北京に相対し、この時点で竹内に想起された故郷は、東京か、あるいは日本という実在の郷土だと読み取れる。たとえば、一九三八年一月九日の日記において、竹内は「夜、東京ゆきの空想に。どうしても寒暇を利用して一度帰りたいと思う。旅行の意味もあるし、精神の転換と仕事の区切りが必要であろうと思われる、六月までは待てまいと思う」と記述している。

竹内は帰国後の日記においても、「日本」という「故郷」へ帰還した感慨深い心境を語っている。一九三九年十月十九日の日記では、「いよいよ日本へついた。…」もとは日本の山河の温かい感触があの女の荒んだ感情を柔げてくれたからだと思えば思える」と記している。続いて、一九三九年十月二十日の日記において、「さつきこの繁華な温泉街を一廻りし、武庫川にかかった狭い木橋の上に立つて山の端に上る半月を眺めた。流石に川風が寒い。こんな人工的な場所でもやはり日本の風景はたしかに感じるのだから不思議なものだ」と記す。

さらに、帰国後一ヶ月ほどして、竹内は、一九三八年一〇月から翌年一月までの分の日記の一部を、私生活に関わる部分を除いたかたちで「二年間(黙することの難しければ)」と題して『月報』第五七号(一九三九・一二)に掲載したが、その前書きにおいて次のような感慨を吐露している。

二階の武田の書齋、しつとりと東京在の空気が包み、忘れてゐた昔の匂いでも嗅ぎ出せさうな、激情の果のやうな懈怠の中に

居て、まとまつた話はあまりしやべらない。「…」武田云ふ。二年間のことは何もかも忘れてしまつたやうな気がする。頷いて僕云ふ。たとへば発狂しきうな気持だ。内からあがき出しようとするものがあつて、何であるか失語症のやうに思ひ出せない、声に出せばけらけらと響くであらう、何とも云ひやうのない途方に暮れた焦燥、不安。密度のちがつた空気の中へいきなり抛り込まれた感じだ。

上記に述べてきたように、竹内が北京現地でノスタルジアが呼び覚まされた時、想起されたのは東京と日本の自然や風物であつた。つまり、「遠隔効果」で北京を異郷として認識したとたん、自身の〈故郷〉を東京・日本という空間として竹内は見出したのである。この認識は再び帰還した日本という風土の中に馴染めてから再確認された。この出郷による故郷を再発見させるプロセスをより鮮明に示して見せたのは、竹内の盟友である武田の「望郷」<sup>(58)</sup>という一文における記述である。

一九四七年、戦地からの帰還のさい、船が瀬戸内海に入るや私は今さらながら日本の自然の美しさを感じた。秋の海に点在する島々の緑には眼を洗われ胸も高鳴つた。故郷を望み、故郷を誇るのには人情の自然である。故郷よ、美しあれ、正しくあれ、富みてあれと願わぬ者はない。定着して永住している者は、かえつて故郷を忘れがちになる。国外にあつて人は初めて故郷を発見する。故郷に帰來した瞬間にこそ、人はにこらぬ眼で自己の故郷の性格をすみずみまで

ハツキリと認識するものである。欠点も美点も彼らの眼には、つわりなく映し出される。(傍点部は引用者による)

文中に描かれた、国を出た人たちが「国外にあつて」こそ故郷を再発見でき、一層〈故郷〉への愛情がそえられる、ということを竹内は同じように体験していたわけであろう。つまり、他者としての中国との一体化という志を果たせなかつた北京という異郷での体験は、竹内自身の日本人としてのアイデンティティと、日本という普遍性をもっている〈故郷〉を再発見するきっかけとなつたのである。次に、故郷が再発見されたことで自分のナシヨナリティ・アイデンティティも再認識した竹内と、この精神的な経験が同誌における言説とどのように連動したのかを検証したい。

### 3 国民共同体への帰属意識

『月報』第三号（一九三七・二）の「私と周囲と中国文学」における「対象としての中国文学―それは私にとつて、中国文学であると共に、中国文学としての響きをもつ」（傍点部は引用者より）という記述から、この時期の竹内が、中国文学を日本文学と対等の立場に置き、中国文学・文化への敬愛と憧憬の念をもっていたことが読み取れる。そして、「中国文学研究について」（『中国文学』第六〇号、一九四〇・三）という、はじめて雑誌を手にする読者に向けて書かれた説明文において、竹内は再び、研究会「設立の目的は、会則に『中国文学の研究と日支文化の交驩を目的とする研究団体』と述べられてゐるやうに」と強調し、「我々の仕事の目標は、支那文学の

代表的古典及び現代文学の翻訳、支那文学史の刊行、支那文化図書館の建設、漢文教育、支那語教育及び日本語教育の批判、事変後途絶えてゐる支那の文学団体との提携の復活等である」と宣言し、同誌が学術同人誌であることを強調した。そして、同号の「後記」において、「巨きな流れが私たちを押し流さうとする力に抵抗する」自覚があつた竹内は、さらに「この会は何処からも財政の援助を受け」ていない一文を付け加えて研究会が政府との距離を置いていることを強調していた。

ところが、同誌が転換期を迎えたと同時に、誌面においても、この主張とズレる言説が滑り込んでゐる。例えば、竹内は「僕らの雑誌が、日本の平均文化を一分でも高めるものでありたい。一分でも低めるものでありたくない」と説き、さらに「支那と中国」(『中国文学』第六四号、一九四〇・八)においては、「中国」と「支那」との二つの言葉の歴史的な意味合いを解釈し、研究会を始めたときは「少しの疑惑も抱かなかつた」「中国」という言葉を中国人が「被侮蔑感」のある「支那」という呼称に代えようとする経緯を語つてゐる。

さて僕は、かつて中国と口にも出し筆にもした僕は、いま口に出し筆にすることに気持が落着かない。この変化はいつころ起つたのであらうか。二年間北京に暮らすやうになつてから、僕は支那といふ言葉に忘れてゐた愛着の念を再び感じ出してゐた。(…)

放蕩無頼の留学生の多くがそうであるように、僕も洋車ひきの男たちを友としてしばしば自虐的な快感を食つた。(…)

僕は東京のバスに乗つて、車掌の愛嬌さえ気になるが、洋車ひきとの交渉はせいぜい一片の銅貨を多く地上に擲きつけるだけで解決がつく。(…)

車夫に支那人を発見して僕が支那という言葉を使うようになったとすれば、説明はまことに簡単だが、実際はそんなわけではない。たしかにかれらは支那人である。厚手の絨毯を敷きつめた客間で、相手の顔色を窺いながらおすおすおす口に出す中国人という日本語の響きは決して浮かんでこない。

この回想文を通して竹内は、北京時代には日本エリート知識人として中国人民衆側の代表的な洋車ひきに接して、その中に溶け込んで行くわけではなく、「しばしば自虐的な快感を食つた」という支配者側の俯瞰的な感情しか生まれてこなかつたことを露呈している。日中両国の民衆の代表として、「交通機関」の従業者として日本側の車掌と中国側の洋車ひきを比べ、日本側の「車掌の愛嬌さえ気になる」が、中国側の「洋車ひきとの交渉はせいぜい一片の銅貨を多く地上に擲きつけるだけで解決がつく」という、中国人民衆と日本民衆とのイデオロギーの差を竹内は認識し得た。洋車ひきを代表とした中国人民衆の大多数は、「政府や地主から搾取される被害的状況のなかに閉じこめられ」、民族意識と抗日思想も形成してゐない。この実状に直面した竹内は、「俺はこの男に何を加え得るであらうか」という自問を連発し、無意識的に支配者側のエリートの日本知識人としての指導性を強調するようになり、日本人というアイデンティティで押し通していったのである。

同号の「後記」において、竹内は日本人と中国人との隔たりを明

確化して、次のように語っている。

あんまり支那を馬鹿にしなざるな、と僕が支那人なら憤慨するところだが、幸にして僕は日本人だから、「…」こんな不満を展べうるだけ弱国の民に生れなかつた仕合せに感謝してゐた方がいゝのかもしれない。

この文において、竹内はもつとも明確に日本人としてのアイデンティティと日本帝国・民族としての優越感を吐露している。その後誌面においても、竹内は「支那文を読む為の漢字典」（『中国文学』第六七号、一九四〇・二二）では、「現在の漢和字典は漢字崇拜の名残であり、中等学校の漢文科と共に、日本文化のためになるべく速かに廃止が望ましい存在なの」と述べている。そして、「翻訳時評・一」（『中国文学』第六九号、一九四一・二二）において、訓読みをメインとした古典の翻訳と現実の支那を理解するための翻訳との間には「天地の隔たり」があることを指摘した上に、次のように主張している。

日本語を支那語に合わせようとするのではなく、逆に日本語によつて支那語を解釈しようといふのが独立した翻訳の態度である。

日本文化は今なほ支那文化の支配から完全に抜けてゐないといふことにもなる。文字を共通することと言葉を共通することは別である。日本語と支那語が全く異なつた言語だといふことを、われわれ言葉の職務にたづさはるものは繰返し説く必要が

ある。

また、「翻訳時評・二二」（『中国文学』第七〇号、一九四一・三）において、「今日の日本語は、近代語としての語彙や語法を、支那語に求める必要はほとんどなく、固有の造語法や造句法を反省して、空粗な漢字の桎梏から解放する方がむしろ急務であらうと思ふ」という。

以上で確認したように、この時期の竹内は「翻訳時評」と「翻訳」論争を通して領有可能な「支那」の存在を唱えていた。歴史的な中国文化の支配から抜け出して「一人歩き」出来る日本文化の独立を訴える姿勢と日本の文化構造を見直す呼びかけは、実は日本帝国主義の文化ナショナリズムと同質的なものだと言える。同時に、このような言説には「中国を属領化することを志向」する「帝国主義的な領土拡張・確定の論理を孕み込」んでいる。

それが勇ましくエスカレートして極点に達したシンボルとして「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」（『中国文学』第八十号、一九四二・二）がある。

歴史は作られた。世界は一夜にして変貌した。「…」戦争は突如開始され、その刹那、われらは一切を了得した。天高く光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた。「…」今日、この国家の盛事に際会して、自らの内に非凡の体験をもち得たことは、生涯の幸と申さねばならぬ。「…」わが日本は、強者を懼れたのではなかつた。すべては秋霜の行為の発露がこれを證かしてゐる。国民の一人として、この上の喜びがあらうか。

「…」われらは、わが日本国と同体である。「…」この世界史

の変革の壮挙の前には、思へば支那事変は一個の犠牲として堪へ得られる底のものであった。「…東亜から侵略者を追ひはらふことに、われらは祖国を愛し、祖国に次いで隣邦を愛するものである。」

対米英開戦への積極的な態度を示したこの宣言には一種のロマンチックな情緒が漂っている。前線のリアルな戦況に関する客観的な認識が欠けていて、「中国文学」「全体の雰囲気から遊離し」、「いささか唐突にさえ見え」る。そして、「宣言」の内容からいうと、竹内の思考から、「知識人も民衆も一括した日本民族というワクに対する懐疑が、欠け落ちて」いて、宣言の末尾で「諸君、共にいざ戦おう」と言挙げするときの「諸君」には、「中国人をはじめとするアジア人がふくまれていない」<sup>64</sup>。いわば、この時点での竹内は日本民族の優越性を信じて疑わなかったであろう。竹内の十二月八日付の未刊の日記に記された、「一、徳国民は、今たしかに、一致したとは思はれる。不思議なことである。昨日まではどうしても否定的にしか考へられなかつた。今日はそのもやもやが吹き飛んだ感じを掩ひえない」<sup>65</sup>という言説からも、同誌における宣言はその時期の竹内の揺らぎによるものであることがわかる。そして、同月一日付の日記において、「戦争に処する方策協議のため同人会を開」いた際、「一月号に宣言を書くこと、とにかく反対ではないと云ふ」<sup>66</sup>とした記述がある。一方、同誌は日本内地で発行されたものであり、言論統制の厳しい銃後で、反戦的な姿勢などということとは、決してできなかつたとはいえ、その言説の根底には、対米開戦と緒戦の勝利で興奮した銃後にいた日本国民の一人としての竹内の国民共同体意識が働い

ていて、それに、民族主義の昂揚の頂点に至ったといえるのである。ところが、この「宣言」によって竹内は戦争のさなかで文学のナシヨナリスティックな変容に転じたか理解できるのであるか。この点について、翌年の二月から四月までの中国体験を経た後の言動の変化が、雑誌にどのように反映されているのか、という視点から確認しよう。

#### 4 故郷からの再出発

一九四二年一月二一日付の、竹内から研究会の同人の中の重要なメンバーの一人である松枝茂夫の手紙には、「戦争によって小生心境変化を生じ、再出発のため一度支那を見てきたいのと、友人から頼まれた仕事と回教関係の調査を兼ねています」<sup>67</sup>とある。そして、竹内は二月二二日から四月二七日まで「八〇日ばかり」中国に渡った。「主要な任務は現地の機関や人との連絡」<sup>68</sup>であった。この期間に、竹内が立寄った都市には、北京、張家口、厚和（フフホト）、包頭、大同、太原、開封、徐州、南京、上海、蘇州、杭州がある。その間の旅行記は四回に分けて雑誌に発表され、北京時代の文章とは違つて「落着きが見える。風物や子どもたちの描写が物静かに語られている」<sup>69</sup>のであるが、その中からは竹内の戦争に対する態度は読み取れない。しかし、帰国後発表された文章からは、竹内の思想的変化が読み取れる。「大東亜共栄圏と回教」<sup>70</sup>において、「大東亜共栄圏の建設」は困難であるが、「それを実現するという希望は、決して見失うことがない」。そして、「民族、言語、政治組織、社会機構」等の雑多な様態を提示している。同年九月、「新しい支那文化」<sup>71</sup>におい

て、竹内は下記のように記述している。

支那の文化は、今日、ほとんど破壊されている。残ったものは、概して言えば、文化の名に値しないものである。〔…〕

文化の破壊者は、破壊さるべき文化の破壊者としてある時、むしろ荣誉である。ただ遺憾なことは、その破壊が外部的な、機械的な破壊に止って、根柢の歴史の書き換えにまで努力が及ばないのでないかという点である。

日本側と支那側を問わず、事変後、さまざまの文化提携の試みや新文化と称する運動が行われて来たが、その多くは、新しい文化の想像というより、旧来のものを借りてその場の間に合わせに近かった。真に生かされるべきものが見棄てられていたり、その半面に有力な文化人の出慮を妨げるような非文化的な人物の跳梁を許したりする混乱があった。〔…〕

大東亜共栄圏を担う国民文化に昇華するためには、〔…〕大東亜共栄圏を規範とする日本文化が、その全身を支那文化に没入することによって、自らを鍛えられた輝きあるものとしてそこから引き出す過程において、対象的に支那文化をそれ自体に新しい支那文化たらしめるようなものでなければならぬ。

つまり、竹内は真の意味の日中の文化提携を望んでいたが、その不可能性を認識した後、一九四二年一月に東京で開催された第一回大東亜文学者大会への参加を「多忙の故をもつて」拒否したのである。『大東亜文学者大会について』（『中国文学』第八九号、一九四二・一一）における「僕は、少なくとも公的には、今度の会

合が、他の面は知らず、日支の面だけでは、日本文学の代表と支那文学の代表の会同であることを、日本文学の荣誉のために、また支那文学の荣誉のために、承服しないのである。承服しないのは全き会同を未来に待つ確信があるからである」という言説から感じ取られるのは、この行動を通して「大東亜共栄圏」の仮面を着ている帝国日本主義の文化宣揚と戦争への非協力を明らかに示していた、ということである。

その三か月後、当局の注意と出版社との関係の悪化によって、竹内は同誌の廃刊を決定した。「中国文学の廃刊と私」（『中国文学』第九二号、一九四三・二）における「大東亜の文化は、自己保全文化の超克の上のみ築かれる」及び「大東亜の文化は、日本文化による日本文化の否定によってのみ生まれる」という言説は、アジアにおける日本主導的な存在を唱えることではなく、アジア民族への目差しが初めて竹内の内面において形作られるようになったという証拠でもあろう。

##### 5 戦争による青年知識人の言動の揺れ動き

同誌誌面における竹内の言説からは、戦争によって影響された内的な変化過程をうかがうことができる。竹内は中国文学・中国人への幻想をもって北京に赴く途中、天津の塘沽駅で偶然に会った研究会の同人陣内少尉について、「それほど常の陣内氏とは様変り、何よりも凛として元氣であった」と描写しており、侵略者の姿を見ないかのようなのである。その時、竹内は対中国侵略戦争についての明確な認識があったわけではない。しかし、北京現地で占領当局と

のかかわりや、中国知識人・民衆と接触したりする中で、その思想は徐々に歪んでいった。竹内は、日本人としてのナショナルティ・アイデンティティ及び日本民族に対して疑いをもたずに、自信を持って最終的に銃後で日本国民共同体へ帰属し、太平洋戦争に対して反対ではない、という立場に立ったのである。ところが、再びの中国行で竹内は、大東亜建設は結局日本軍によつて建てられたフラグにとどまつており、侵略戦争は中国文化を破壊するだけだ、と認識した。それで、自分の行動によつて、この政治によつて支配された文化の交流のシステムを拒否したのである。

国家を突き放すほどの徹底した抵抗意志ではないとはいえ、大東亜文化大会に参加していたとすれば、当時の竹内の人脈と経歴では、帝国日本主義文化政策に関わる公的機関に勤め、兵士として応召されなくては可能性がなかったわけではない。ところが、竹内はそのような選択をしていない。

それに、戦時中、日本ナショナルリズムに同化した言説が混入されたことだけで、同誌が時局に迎合していたと片付けることはできないし、竹内が体制側に協力するようになったともいえない。というのは、同誌の周辺にあつた研究会の旧同人の一人のメンバーは、いずれも二〇歳代なかばから三〇歳前後の青年知識人であつた。中国文学・中国人への幻想をもつて祖国の日本を出たのは、竹内一人だけではない。彼らは戦時下において、否応なしに国策から逃れることができず、そのほとんどが中国現地に渡つた経験がある。各自の立場に立つて竹内と同じように日本側の思想的・政治的な背景及び文化統制から帝国日本ナショナルリズムに対した揺らぎはあるにちがいない。本論文は、まさに戦争による一人の青年知識人の思想的

なものへ模索を客観的に研究していこうという試みの一つである。竹内の言説に焦点を当てたのは、竹内の言動を裁いたり、弁護したりすることではない。むしろ、言論統制と思想統制の戦時下において、竹内のような青年層知識人は離郷と帰郷の行動を通し、つまり中国とのかかわりの中で自分のアイデンティティ・ナショナルティを再発見し、戦争でその言動は否応なしに揺れ動きを示しているのである。

\*本章における雑誌『中国文学月報』『中国文学』の引用に当たっては、一九七一年三月〜一九七七年一〇月に汲古書院より刊行された複製版を使用している。

(1) 一九三四年一月に竹内好の呼び掛けによつて、武田泰淳と岡崎俊夫を中心的なメンバーとして結成された。最初の会合に出席した同人は、戸務、岡崎俊夫(当時、二五歳)、竹内好(二四歳)、武田泰淳(二三歳)、増田涉(三一歳)、一九三一年に上海に留学、松井武男、松枝茂夫(二九歳)、一九三〇年に北京に留学)の七名(竹内好「中国文学研究会結成のころ」『竹内好全集』第十五巻、一九八一・十、筑摩書房、四〇頁)。八月四日、公式に会の名を使用し始めた。

(2) 一九三六年一月、一九四〇年三月、一〇月、一九四二年四月、一九四三年二月の計五回。

(3) 竹内好「後記」『中国文学月報』第一号、一九三五・三

(4) 朱琳「二人の「弱者」の交錯―一九三〇年代における竹内好・武田泰淳の中国体験を中心に―」『国際文化研究』第二二号、二〇一五・三、東北大学機関リポジトリ、一一三頁

(5) 竹内好「北京通信」『中国文学月報』第三十三号、一九三七・一二

(6) 飯倉照平「近代日本と中国―竹内好と武田泰淳」『朝日ジャーナル』第一四巻第四九号、一九七二・一一・二四、朝日新聞社、三六〜四三頁)によると、二一九一七年の文学革命から一九年の五四運動をへて、しだいにそ

の実質的な内容を持ち始めていた」中の現代文学を日本人としてそれを同時代的に紹介したのは、ジャーナリズムでは、「一九二六年七月の『改造』現代支那号あたりからである」。しかし、研究会が成立するまでの一九三〇年代初頭に同時代の中国文学を扱ったものは、「孤立した動きしかなかった」（三七頁）という。

(7) 大原祐治「日本」と「支那」のあいだ―中国文学研究会における竹内好と武田泰淳―（『文学的記憶・一九四〇年前後―昭和期文学と戦争の記憶』二〇〇六・一一、翰林書房、一八二頁）を参照。初出：大原祐治「北京の輩と兵隊」―『中国文学月報』における竹内好・武田泰淳―（『学習院大学人文科学論集』第一二号、学習院大学大学院人文科学研究科、二〇〇二・一〇、一〇四頁）

(8) 研究会の一四人の同人は、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫、松枝茂夫、増田渉、実藤恵秀、千田九一、飯塚朗、小野忍、斎藤秋男、一戸務、陣内宜男、吉村永吉、土居治である。

(9) 戦後、竹内（二四六年七月に帰国）、武田（一九四六年三月に帰国）、岡崎らがまだ中国から復員していなかった一九四六年三月に「華々しいジャーナリズム復興」の機運に恵まれて復刊されると同時に、研究会の「復活」を宣言したが、一九四八年五月、第一〇五号をもって休刊した。戦後発行された『中国文学』は十三号あるが、竹内が露出したのは第百号の座談会「東方文学における世界性と地方性」と第一〇五号の「文学革命―魯迅の文学史的背景」の二号だけである。本論では、戦後の刊行物については研究対象としていない。

(10) 前掲朱「二人の「弱者」の交錯」と前掲飯倉「近代日本と中国」を参照し、以下の通りまとめた。

一回目…一九三二年八月〜十月、学生であった竹内は外務省対支文化事業部からの半額補助で朝鮮満洲見学旅行をした。その間、個人的に北京に足をのびして一月あまり滞在した。

二回目…一九三七年十月〜一九三九年十月五日、外務省文化事業部の第三種補助金を利用し、語学研修の名目で、北京へ留学。

三回目…一九四二年二月〜一九四二年四月、回教圏研究所の調査員として中国出張。

四回目…一九四三年〜二月〜一九四六年六月、兵士として中国現地へ。

(11) 「筆者索引」（復刻『中国文学』別冊、一九七一・三、汲古書院、二三三頁）

(12) 飯塚容「中国文学解説」（『占領期雑誌資料大系 文学編』第五巻、二〇一〇・八、岩波書店、二七七頁〜二八二頁）。飯塚が二〇一〇年四月九

日に占領期雑誌記事情報データベースで検索したところによれば、中国文学研究会旧同人の著作の件数は、「武田泰淳・一〇〇件、岡崎俊夫・三六件、斎藤秋男・三四件、竹内好・二八件」であった。飯塚はこの結果をもって、「武田の場合は作家としての創作が半数以上を占める」からこそ、「武田による中国文学紹介は効果的だった」（二七九頁）、と主張した。

(13) 孫歌『竹内好という問い』（二〇〇五・五、岩波書店、一九頁）。また、孫歌の「竹内好に学ぶこと」という題名の講演（第12回北京日本学術交流会報告、清華大学人文社会科学学院、二〇一九年三月六日）においても言及している。

<http://takeuchiyoshimi.holy.jp/special/sonka.html>

(14) 前掲大原「日本」と「支那」のあいだ」二二七頁

(15) 前掲朱「二人の「弱者」の交錯」一一四七頁。朱は、竹内は、北京の「日本化と擬制された泰平さ」に「文学による中国理解の無力感を覚えた」と同時に、「彼の政治的な自覚が促された」（一一七頁）のに対し、武田は、「文化を造出する主体」の「人間」と文化が共に喪失されたことを認識し、「目の前の中国人の様態によって形成された現実的な中国文化観へ転換した」（一一九頁）、と論じた。

(16) 岡本麻子「竹内好の「北京日記」―文学の解体と再生―」（『社会文化史学』第四四号、二〇〇三・一、三頁、八頁）

(17) 「日記」によると、竹内は一九三九年七月二三日に当時万寿という酒場で女給を勤めた峯子と知り合いになった。同年八月五日の「日記」によると、峯子は壬子香ともいう。八月七日の「日記」において、峯子の悲哀を抱えた身の上を記している。彼女の父は道楽して中気で死を待つのみであり、母は三人代って他人に等しい。彼女の夫は気性の荒く、暴力を振るう男である。生活も貧しかったことから、彼女は故郷から東京へ、東京から中国のハルビンへ、ハルビンから北京へと流浪していったのである。この点の詳細について、余禕延「竹内好の文学観の形成―北京留学を契機として―」（『立命館文学』第六六二号、二〇一九・三、七六三頁）を参照した。

(18) 前掲余「竹内好の文学観の形成」七六六頁

(19) 幼方直吉「北京・上海における竹内好の生活とその意味」（『思想の科学』第六次第九号、一九七八・五、一〇頁、一五頁、一五頁）。「日中戦争のまがり角の直後」とは、一九三三年の満洲事変後、一九三七年の日中戦争全面化、一九四一年の上海租界の接収、（一三三頁）を指す。幼方によると、戦前にしても、戦後にしても、竹内は「民主主義的センスから離れることなく」、中国人を人間として凝視していた。戦後になって4回の

中国体験は、中国の民族的主義の形成の原型だと指摘していた。

- (20) 前掲飯倉「近代日本と中国」三六〇―四三三頁
- (21) 竹内好「孫文観の問題点」『竹内好全集』第五卷、一九八一・三、筑摩書房、二五頁
- (22) 竹内好「後記」『中国文学月報』三三三号、一九三七・一〇。「北京」は一九二八年に「北平」と改称されており、日本軍占領期には再び「北京」の名称が用いられているが、ここでは「北京」に統一した。
- (23) 晏妮『戦時日中映画交渉史』(二〇一〇・六、岩波書店、一三七頁)によると、一九三七年七月七日の盧溝橋事件の前までは、「もっぱら上海に釘付けになっていた日本人の熱い視線は、占領に伴って北京に転移するようになり、「華やかでモダンな雰囲気」を漂わす上海と比べて、名所旧跡が散在し伝統文化の色に染められた北京は、日本人にとって異国情緒溢れる都市として上海とコントラストを成すものだった」という。
- (24) 越沢明「日本占領下の北京都市計画」(一九三七―一九四五年)、『第五回日本土木史研究発表会論文集』一九八五・六、二六七頁
- (25) 瀧川政次郎「北京と日本」『中央公論』一九三八・六、三四三頁)によると、事変後、内地からの日本人観光客は「放流の如き殺到であって、北京の日本人旅館はいずれもこのところ連日満員の盛況」だったという。
- (26) 前掲越「日本占領下の北京都市計画」二六七頁
- (27) 安藤彦太郎「抗戦期における大学教育と知識人―西南聯合大学をめぐる―」『深まる侵略 屈折する抵抗』一九三〇年・四〇年代日・中のはざま』二〇〇一・一一、研文出版、一六二頁) 安藤によると、ここは「抗日戦争中、国民政府支配地区すなわち「大後方」の文化、学術の中心となり、また「民主運動」の中心ともなった」(二六二頁)のである。
- (28) 中園英助『わが北京留恋の記』(一九九四・二、岩波書店、一一九頁)
- (29) 鄒双双「日本占領下の北京における文化人―錢稻孫と周作人を中心に―」『近代世界の「言説」と「意象」…越境的文化交渉学の視点から』二〇一二・一、関西大学文化交渉学教育研究拠点、三三二頁
- (30) 前掲余「竹内好の文学観の形成」七六〇頁
- (31) 竹内好「北京日記」『竹内好全集』第十五卷、一九八一・一〇、筑摩書房、一三四頁
- (32) 彭程「『新民主主義』の成立過程について」『国際文化学』第二一号、二〇〇九・九、神戸大学、一三九頁
- (33) 前掲彭「『新民主主義』の成立過程について」一四四頁、一五二頁、一五三頁。彭によると、新民主主義は、当時の日本軍が新民会という傀儡組

織を通した中国ナショナリズムへの思想的な防衛と中国人の協力を獲得するためのイデオロギーである(二三九頁、一五三頁を参照)。その内容として、本文中において紹介されているように、仏教・儒教・道教などの要素を取り入れた広大なものであるため、それに関する中国語の原典は七頁しかないというわけではないと想定する。

- (34) 前掲彭「『新民主主義』の成立過程について」一五一―一五二頁
- (35) 前掲彭「『新民主主義』の成立過程について」一五〇頁を参照。
- (36) 一九三八年二月三日の日記によると、留學生の後輩の久沢は竹内に「あなたの『新民主主義』はとても役に立ちましたよ」と話し掛けた。そして、二月四日の日記では、「錢先生と周先生が理学院は竹内さんのような人を教師にしていざいたくだと云った」という言論から、竹内は占領当局側にも、留學生にも、一定の知名度があったと推定できる。
- (37) 竹内好「北京日記」(前掲『竹内好全集』第十五卷) 一九八二年三月一〇日、一五日、一七日の日記による。
- (38) 安野一之「華北占領地域における文化工作の諸相」(『淪陥下北京』一九三七―四五、抗争する中国文学と日本文学』二〇〇〇・六、三元社、三三五頁)
- (39) 宇野重昭「抗戦下の中国民衆の生活世界」『深まる侵略 屈折する抵抗』一九三〇年・四〇年代日・中のはざま』二〇〇一・一一、研文出版、二五九頁
- (40) 石剛「淪陥下北京の言語的憂鬱」(『淪陥下北京一九三七―四五、抗争する中国文学と日本文学』二〇〇〇・六、三元社、三〇三頁)
- (41) 小林基起「竹内好「北京日記」時代について」(前掲『淪陥下北京』一九三七―四五、四四―二二頁)
- (42) 木山英雄『北京苦住庵記―日中戦争時代の周作人―』(一九七八・三、筑摩書房)
- (43) 鄒双双「30年代の北京における錢稻孫像―日本人留學生の目を通して―」(『東アジア文化交渉研究』第五号、二〇一二・二、関西大学文化交渉学教育研究拠点、八九頁)によると、錢は日本軍占領下の北京大学学長を担当していた。
- (44) 一八九五―一九七八年、一九一二年、日本へ留学し、一九二一年、郭沫若、郁達夫と雑誌『創造社』を創刊。帰国後、一九二三年から北京大学で日本語教授を担当していた。日中戦争勃発後、日本占領下の北京師範大学学長に就任したことがある。経志江「中日国交断絶期における唯一の日本語・日本文学教授―徐祖正」(『日本経大論集』第四二卷第一号、二〇一二・一二)において、徐祖正の早年の経歴を詳細に紹介されている。

- (45) 第一・二回大東亜文学者大会に出席した経歴がある。杉野要吉「淪陥下北京における「親日」派文学者の運命 沈啓無について」（前掲『淪陥下北京一九三七―四五』二九九頁）を参照。
- (46) 第一回大東亜文学者大会に参加した。張泉「淪陥時期における張我軍と中日文学との関わり」（前掲『淪陥下北京一九三七―四五』二一〇頁）を参照。
- (47) 一九一四―一九九〇年。漢学者、経済史家、ハーバード大学教授。一九三七年に清華大学経済学部を卒業、一九四〇年にハーバード大学に赴く。一九四六年に博士学位を獲得した後、ハーバード大学に勤める。「日記」によると、錢稻孫の紹介で中国語講師として竹内のところを通いはじめた。(48) 一九三七年八月北京に留学。北京で発行されていた唯一の日本語雑誌の『燕京文学』の同人でもある。永井健一「戦時下の飯塚朗『燕京文学』『中国文学月報』を中心に」（前掲『淪陥下北京一九三七―四五』四三七頁）
- (49) 一九三七年七月出征、北京に滞在した。
- (50) 一九〇九―一九五九年。研究会を最初に立ち上げた三人のうちの一人で、東京帝国大学での竹内の一年先輩にあたる。朝日新聞記者として北京に渡り、『燕京文学』同人。一九四〇年九月東京へ転任になった。
- (51) 当時、留学で北京にいた。
- (52) 一九三七年一〇月三〇日の「北京日記」による。
- (53) 戸塚麻子「日本占領下北京の友情と青春」（『滋賀文教短期大学紀要』第一八号、二〇一六・三、三七頁）を参照。
- (54) 松本健一「竹内好論―革命と沈黙」（一九七五・一二、第三文明社、四五頁）
- (55) 「竹内好の手紙（上）」一九三六―一九五二―松枝茂夫・武田泰淳・家族宛」（『辺境』第三次、一九八七・十、記録社）に掲載された竹内の四通の手紙による。竹内が一九三五年八月三日から十九日まで長野県の海の口に滞在していた間に、東京にいた武田に送った手紙には、「旅館は東京人で満員で断られ、駅前の雑貨店の二階に落付いてゐる。僕の故郷の従兄が此処で小学校の先生をしてゐたことがあり、その縁故で世話になつてゐる」（二三頁）とある。そして、一九三九年六月二九日付の松枝茂夫宛の手紙では、結婚の話提起して「僕は父親に折れて、この春の帰国するとき郷里の人を貰ふ約束をきめたが、今度の帰国で破約にした」（二三頁）。一九四〇年三月二四日付の東京にいた竹内が松枝に送った手紙では「僕、郷里へ一度帰らんといけない」（二三頁）。同年十月二三日付の松枝宛の手紙にも「亡父埋骨のため郷里へゆき、二十一日帰つて来ました」（二八頁）という。
- (56) 米村みゆき「Makino or 風の又三郎―文部省の戦略と映画教育」（『宮沢賢治を創った男たち』二〇〇三・一二、青弓社、九九頁）。米村によると、「童心」が大人の郷愁を誘っている。米村は、「大人にとつての童心は、自然すなわち、故郷や田舎のイメージと結び付いている」ため、「大人が子供のころを振り返る」ことで、その郷愁（ノスタルジー）が、映画中のなんらかの風物によって呼び起こされていると述べている。竹内は、現実の北京の夕空の風景によって、童心⇄子供の頃への記憶も誘発された、と考えられる。
- (57) 小林敏明「故郷喪失の時代（第二回） 故郷という概念」（『文学界』二〇一八・二〇、文藝春秋、一二二頁）
- (58) 武田泰淳「望郷」（『武田泰淳全集』第十二巻、一九七二・一、筑摩書房、二九七頁）。初出は一九五三年一月二十八日付の『熊本日日新聞』『神戸新聞』などに掲載された。その後、単行本には再録されていない。
- (59) 第二五号において、竹内が、周作人の「日本文化を語るの書」に関する「解説」において、「教養としての中国文学をわれわれが如何なる仕方で行つたかを疑ふ」と述べ、さらに、同号の「会報」の紹介において「日本文学を通じて支那文学に於る支那的なるものを鑑賞者の立場から追求」すると語っていることから、この時点での竹内の中国文学に対する志向性が垣間見える。
- (60) 竹内好「後記」（『中国文学』第六三号、一九四〇・七）
- (61) 前掲大原「日本」と「支那」のあいだ」（二〇一頁）
- (62) 前掲大原「日本」と「支那」のあいだ」。大原は「アメリカと中国」特集（『中国文学』第六八号、一九四一・一）の巻頭文「アメリカと中国」に「竹内らの言説は「アメリカに対抗しつつそのアメリカの身振りを模倣するもの」（二〇八頁）であった、と指摘した。
- (63) 前掲孫「竹内好という問い」一三六頁
- (64) 前掲松本「竹内好論」九七頁
- (65) 前掲「竹内好の手紙（上）」三五頁
- (66) 前掲「竹内好の手紙（上）」三七頁
- (67) 前掲「竹内好の手紙（上）」三八頁
- (68) 竹内好「北支・蒙疆の回教」（『竹内好全集』第十四巻、一九八一・一二、筑摩書房、三五六頁）。初出は『回教圈』第六巻第八・九号（一九四二・九、回教圈研究所）。
- (69) 中には「旅日記抄・一」（『中国文学』第八五号、一九四二・七）、「旅日

- 記抄・二」(『中国文学』第八六号、一九四二・八)、「旅日記抄三」(『中国文学』第八七号、一九四二・九)、「旅日記抄・四」(『中国文学』第八九号、一九四二・一〇)がある。
- (70) 前掲飯倉「近代日本と中国」三九頁
- (71) 竹内好「東亜共栄圏と回教」(『支那』東亜同文会業務部、一九四二・七)。本引用は前掲『竹内好全集』第十四卷(三五五頁)を参照。
- (72) 竹内好「新しい支那文化」(『国民新聞』東京版、一九四二・九・二四・二六・二七・二九日付) 本引用は前掲『竹内好全集』第十四卷(三八〇頁)を参照している。
- (73) 竹内好「北京通信」(『中国文学月報』第三三号、一九三七・一二)